

# 陳舜臣さんを語る会通信

NO.93 Jan. 2023

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34  
橋雄三方「陳舜臣さんを語る会」  
Tel.078-911-1671  
編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員  
発行日 2023年1月1日  
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

## 2023 司馬遼太郎 2024 陳舜臣 生誕百年

司馬遼太郎(1923.8.7-96.2.12)さんは今年、陳舜臣(1924.2.18-2015.1.21)さんは来年、生誕百年を迎えます。それぞれ、どんな記念行事が行われるか楽しみです。本号では、お二人の対談ほか、鼎談、座談、ご一緒に登場される作品を取り上げました。なお、『街道をゆく 25(閩のみち)』は既に、本通信No.10で紹介していますのでここでは省きます。■遼太郎の「遼」は「辮」(二点しんにょう)です。(編集委員 橋雄三)

私が大阪の語学の学校に通っていた昭和十年代の後半、神戸から通学している学生のなかで、陳姓のひとつがふたりいて、どちらも温厚で秀才の評判が高かった。ひとりには中国語を専攻していた陳徳仁氏であった。他のひとりにはインド語を専攻していた陳舜臣氏で、陳舜臣氏によると、神戸からの通学組のひとつたわがこの同姓の両人を区別するのに、わざわざ陳徳仁氏のほうを、男前の陳とよんでいたという。陳舜臣氏も決してぶおとこではないのだが、陳徳仁氏が鼻筋のおつた面長の容貌で、姿勢



左から、モロゾフ、金井厚、陳舜臣、司馬遼太郎、陳徳仁の各氏(1982年7月、中華総商会会議室) 神戸華僑歴史博物館蔵

『街道をゆく21 神戸・横浜散歩、芸備の道』  
「陳徳仁氏の館長室」より転載  
傍線は編集委員の加筆

がいい上に、撓うような瘦身であったためにそういう符牒(?)がふさわしかったのだろう。

二十余年前、陳舜臣氏が江戸川

乱歩賞を受けたとき、この賞の事務を主掌している講談社のS氏がわざわざ電話で報らせてくれた。

「あなたとおなじ学校だった陳さんが『枯草の根』という作品で賞をうけられました。」

陳舜臣氏が小説を書いていることを知らなかった(夫人以外、だれも知らなかったろう)ために、それはシナ語の陳さんですか、インド語の陳さんですか。

と、問い直した。S氏は、電話の震動板のおこうで笑い出した。(以下略)

■陳徳仁氏(一九一七-一九八)

神戸華僑歴史博物館の創設者、初代館長。孫中山記念館(現在の孫文記念館)開設にも尽力。

※補足

陳徳仁氏を「大陳」、陳舜臣氏を「小陳」と呼ぶ教員もいた。また、徳仁氏は既に結婚していたので、「奥さんもちの陳さん」とも。

『週刊朝日』一九八二年十一月五日号誌面

72.11.5 週刊朝日 62

### 街道をゆく

連載紀行 第560回

#### 神戸散歩 ④ 司馬遼太郎 え須田克太 (観字・横方志功)

##### 陳徳仁氏の館長室

私が大阪の語学の学校に通っていた昭和十年代の後半、神戸から通学している学生のなかで、陳姓のひとつがふたりいて、どちらも温厚で秀才の評判が高かった。ひとりには中国語を専攻していた陳徳仁氏であった。他のひとりにはインド語を専攻していた陳舜臣氏で、陳舜臣氏によると、神戸からの通学組のひとつたわがこの同姓の両人を区別するのに、わざわざ陳徳仁氏のほうを、男前の陳とよんでいたという。陳舜臣氏も決してぶおとこではないのだが、陳徳仁氏が鼻筋のおつた面長の容貌で、姿勢

二十余年前、陳舜臣氏が江戸川乱歩賞を受けたとき、この賞の事務を主掌している講談社のS氏がわざわざ電話で報らせてくれた。「あなたとおなじ学校だった陳さんが『枯草の根』という作品で賞をうけられました。」

陳舜臣氏が小説を書いていることを知らなかった(夫人以外、だれも知らなかったろう)ために、それはシナ語の陳さんですか、インド語の陳さんですか。

陳徳仁氏を「大陳」、陳舜臣氏を「小陳」と呼ぶ教員もいた。また、徳仁氏は既に結婚していたので、「奥さんもちの陳さん」とも。

『週刊朝日』一九八二年十一月五日号誌面

# 『対談 中国を考える 司馬遼太郎 陳舜臣』内容 (1)

『対談 中国を考える』(1978 文藝春秋) は、四つの対談からなっています。

1972年、日中の国交が回復し、左の表の茶字のとおり、陳、司馬両氏の中国大陸への旅行が実現します。特に陳さんの中国行きは、堰を切ったようです。4回の対談は、そんな過程におこなわれたものです。

文藝春秋版表紙→



『対談 中国を考える』各章題と初出誌ほか		
章	題 ※茶字は陳/司馬の旅行	初出誌
	1972.10 陳/初めての中国旅行	
	73.8 司馬/モンゴルへ →『街道をゆく5 モンゴル紀行』	
	73.8-9 陳/西安、蘭州から新疆へ	
(まえがき)	談天半天 - 陳舜臣	書き下ろし
第一章	東夷北狄と中国の二千年	『オール讀物』1974.8
	74.9 陳/大連、大寨、延安ほか	
第二章	近代における中国と日本の明暗	『オール讀物』75.新春号
	75.5 司馬/中国旅行 75.8 陳/「敦煌の旅」取材	
第三章	日本の侵略と大陸の荒廃	『オール讀物』76.8
	77.7 陳/「シルクロードの旅」取材 77.11 司馬/中国旅行	
第四章	シルクロード、その歴史と魅力	『オール讀物』78.1
(あとがき)	数千年の重み - 司馬遼太郎	書き下ろし

※1975.5 司馬/中国旅行→『長安から北京へ』

文春文庫版 キャッチコピー

古来、日本と中国は密接な関係を保ってきた。だが現実には、中国人は日本にとって極めて判りにくい民族なのではないか。ぶつからないためには理解すること、理解するためには知るのと、両国の歴史に造詣の深い二大家が、この隣人をどのように捉えるべきか、長い歴史を踏まえて深く思索する中国論・日本論。

## 第一章

「東夷北狄と中国の二千年」

■正坐は中国からきた

陳 中国人は正坐ですね。胡人はあぐらです。ですからあぐらは胡坐と書きますね。それから胡床。司馬 胡床という椅子。

■中国人の日本理解は貧弱

司馬 日中のあいだに一つの橋をかけた空海について、非常に小さな関心ではない。要するに中国は、あく



簡単でね。

中国にとって儒教は膚だから

までも明治以後、いち早く近代化をやり出した日本に、自分たちの近代化の問題を重ねあわせて関心を持ったんだと思う。

日本について、中国人もヨーロッパ人も大きく認識を間違ったんだらうと思います。

よく考えたら日本文化は中国文化の支店(ブランチ)ではないんでね。

陳 明治の初めに、中国でいえば清末に、日本に公使館の書記官として来ていた黄遵憲が「日本国志」というのを書いています。これが日本のあらゆることを書いた最初やね。

■翻訳語では中国より日本がうまい

・日本人がつくった言葉を中国が逆輸入：憲法、哲学、経済  
・新しい概念を持って再生：人民、共和

■批林批孔の真のねらい

司馬 日本の場合には儒教よりも漢学的思考法を学んできただけだから、上衣と同じで簡単に脱げるわけだ。洋学的思考法に変えましようと思ったら



孔子を否定し、合わせて林彪(りんびょう)を批判し、文化大革命をもう一度あおるんだ!

(『てんこもり 近・現代漫画日本・世界史』)

■復古主義の罫にかかってはいけない

陳 歴史はそこから、教訓をとり出すべきもので、そこへ戻っちゃなんにもならないとおもう。戻りたいような魅力のある時代が、ほんとうにあるだろうか？ 僕はなかつたと思ってる。

司馬 僕が中国人であっても、心からそう思う。住民にとっていい時代などはなかった。

上の画像は、孔子の話の聞き弟子たち、みんな正坐している

(株)エスピーオー発行『怒の人―孔子伝―』

# 『対談 中国を考える 司馬遼太郎 陳舜臣』内容 (2)

## 第二章「近代における中国と日本の明暗」補足

(『オール讀物』一九七五年新春特大号誌面)



本号、前ページ一覽表、初出誌の欄に表示したように、四回いづれも、初出は『オール讀物』です。そして、多少の加筆と改題の後、単行本化されています。この二回目の対談の元の題は右の画像にある通り、「日本がアジアで輝いた日」でした。そして、次のようなキャッチコピーがついています。

阿片戦争以後、列強の力の前に崩れゆく中国と明治維新でアジアの模範生となる日本。日清戦争前後の日中傑物政治家、思想家の群像



同誌挿絵より

## 第三章「日本の侵略と大陸の荒廃」補足

この章は歴史的背景の対話が多い。まず、日清戦争。

■李鴻章の私兵と戦った日本 司馬 李鴻章は、一隻でも沈んだら、自分の政治勢力がその分だけ減る。だから、できるだけ丁汝昌のような勇将に「ひっこんどれ、ひっこんどれ」と威海衛にひっこませてもらって、結局華々しくやらんじまいで終わってるでしょう。そういうのが日清戦争の戦争としての本質やと思う。

西暦	事件
1875	江華島事件
1876	日朝修好条規
1882	壬午軍変 大院君派の巻き返しクーデター 一時は成功したかに見えたが、閔氏政権復活
1884	甲申事変 金玉均、朴泳孝ら親日派独立党のクーデター、失敗
1894	甲午農民戦争(東学党の乱)

■日露戦争の原因 武器とかを対ロシア用につくろうとしたんです。日清戦争の賠償金でまたでんきょうになっ

西暦	事件
1871	台湾の山岳民、琉球漂流民を殺害
1874	日本、台湾に出兵(西郷従道) 大久保利通北京へ

当時、清国は、新疆省における、回教徒の反乱、ロシアによる領土侵犯など多難であつた

てしまったわけですね。そうするとロシアの圧力は強くなる。だから日本は日露戦争の原因を自分でつくってるわけですね。清国を叩くことで、清国の防衛費が出んようにしてしまつた。そうすればロシアは南下しますわね。

■関東軍の謀略的体質 陳 日本の謀略には議会の承認がいらない機密費があるために、それにく

西暦	事件
1906	南満州鉄道設立(-1945)
1931	柳条湖事件 翌年、満州国樹立
1936	綏遠事件(百靈廟事件)
1937	盧溝橋事件→日中戦争
1939	ノモンハン事件

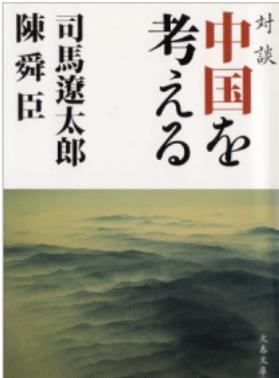
く日本は旧満州というものをガチャガチャにしたわけだね。

## 第四章「シルクロード、その歴史と魅力」補足

司馬 ぼくは初めてだったけど、西域は、陳さんは今度で二度目。…… 陳 そう、新疆は二度ですけど、甘肅省の敦煌をあわせたら西北は三度目ですわ。

陳さんの自家薬籠中のもの、楊增新やうてんしんなどという独裁者のことが出てきたりするが、この章は、概してわかりやすく、また、牛耳るの語源など出てきて楽しい。

文春文庫版表紙



# 陳舜臣・司馬遼太郎 対談、鼎談3編

『文藝春秋』一九七〇年十一月号



同誌面

### 題名に触れた箇所

陳 仏教国でお寺が兵隊を養っていたことはあり  
ませんね。日本の僧兵のように。

司馬 叡山や三井寺の。

陳 中国にも少林寺拳法があるが、あれは健康法  
体操の一種なんです。しかも、拳法を使って僧  
兵を養い寺を守っておったという事実はありませ  
ん。その点で日本は尚武の国だといえるんじゃない  
ですか。それから、非常に派閥好きだといえ  
とですね。

一つグループを作って、それを守るのは武力し  
かないとする考えは、日本人の根本的な思考方法  
だと思えますね。

司馬 中国にしてもインドにしても、武力に頼ら  
ずして自己を守る方法をいっぱい持っておったわ  
けですね。人文で守ろうとする。

陳 日本人は、頭から、武力が一番てっとり早い  
という考え方ですね。いつでも臨戦体制なんだ。

『歴史の交差路にて 日本・中国・朝鮮  
司馬遼太郎・陳舜臣・金達寿』  
(一九八四年講談社)



講談社文庫版表紙

### 文庫版キャッチコピー

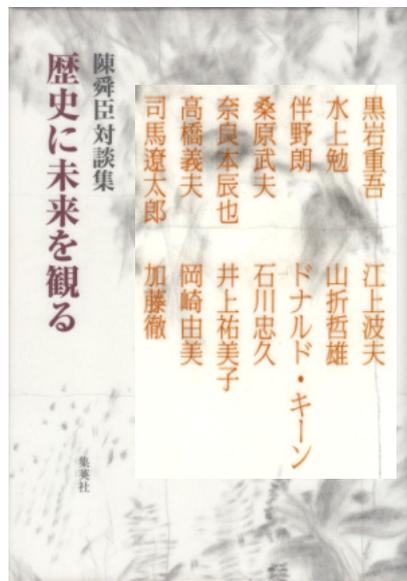
東アジアを舞台に演じられた治乱興亡の歴  
史ドラマから風土と習俗、食の文化、近代へ  
の足どりまでを新たな視点で縦横に語り尽す。  
該博な知識と透徹の史眼で、日本・中国・朝  
鮮の錯綜する三国交流の過去と現在を読み解  
き、より良い隣国関係のあり方を探る。円熟  
の三作家によるエキサイティングな対話集。

### 文庫版「対話者紹介」

#### ■金達寿(キム・タルス)

一九一九年、朝鮮・慶尚南道生まれ。一九  
三〇年来日。日本大学芸術科卒業。神奈川  
新聞、京城日報記者、雑誌編集者などを経て、  
一九四九年『後裔の街』を刊行、作家生活を  
続けている。主な作品に『玄界灘』『朴達の  
裁判』『太白山脈』『日本の中の朝鮮文化』  
『故国まで』等のほか『金達寿評論集』があ  
る。

陳舜臣対談集  
『歴史に未来を観る』(二〇〇四年集英社)



表紙

対談：司馬遼太郎「日本人と国際化」  
初出：『サンケイ新聞』一九八七年一月一日

世界の一員としての日本。日本人はどう生きたい  
いのだろう。「単一民族神話」に慣れた日本人にはむ  
ずかしい課題だ。日本人を見つめつづける二人の語ら  
い。世界を舞台に日本の将来を築く若者たちへの熱き  
エール。

### ◇対談者紹介

#### ■司馬遼太郎

一九二三年大阪市生まれ。大阪外国語学校卒。学徒  
出陣で満州に渡る。戦後、産経新聞社に入社。昭和三  
十四年、『梟の城』で第四十三回直木賞を受賞。『竜  
馬がゆく』『国盗り物語』など著作多数。各時代のさ  
まざまな人物を主人公にした歴史小説ほかエッセイ、  
紀行文でも多くの読者を得た。

